

# 心のそらぞ秋ふかくなる

—良経花月百首の歌の検討—

片山 享

近年、塚本邦雄氏は、その著「藤原俊成・藤原良経」の中で、「心底の秋」の標題のもとに、

寂しさや思ひよわると月見ればこころの底ぞ秋深くなる

の歌を中軸に据え、この歌について「最もすさまじいのは『寂しさや……』の一首であろう。若冠二十二歳の良経にここまで歌わしめたものは何か。勿論天才もあろう。そしてそれよりも二年前急死した二歳上の兄良通、その死者との言問いのゆえではなかったろうか。この屈折した感懐、統む者の心を冥府に誘うかの暗い闇へはただごとではない。幽玄様・鬼拉体も及ばぬこのうすら寒い鬼気には

さしもの定家もしばし声を呑んだことだろう」と鬼気迫る暗い闇へを指摘し、この歌が新古今集以下のいずれの集にも見えぬことから「隠れた傑作」と絶賛されている。この歌に兄良通の死の影を読み

とるか否かは別として、この歌の下句を「心の底ぞ秋深くなる」と詠みくだすとき、確かにただならぬ感慨の深さ、鬼気迫る心奥の寂寥を吐露した述懐歌の様相を呈するのであるが、この歌の下句は、定家本では「心のそらぞ秋ふかくなる」とあり、一字の違いではあるが、歌の趣は一変するのであって、本文批判と内容からの検討が必要であると思われる。

—

秋篠月清集には、定家本系統・教家本系統・両本混滑本系統があり、定家本は良経手沢の草稿本の写であり、教家本は教家の手の加わった整理本であって、本文内容から定家本の優位性は疑いがた

い。ただし、定家本は定家が識語に「字誤無極、不晴覺事不能直付」と記すように、必ずしも完全なものではなく、誤写もあり、圖書等に定家の恣意も加わっていて本文校定は慎重を要することを告げて拙稿で指摘した。<sup>(1)</sup>そこで花月百首の本文異同の検討から始めた。花月百首における定家本・教家本諸本の主要な異同は次の一八である。

(1)谷河の打いつる浪に見し花のみねのこすゑになりける哉(2)

〔教家本校異〕たに河の(日大図書館本) たに河の(桂宮本・

神宮文庫本・蓬左文庫本・関大図書館本・陽明文庫本・御所本

・河野記念館月清集抜書) 谷川を(架蔵本・河野記念館本)

(2)ひら山はあふみのうみのちかければなみとは花の見ゆるなるへし

(7)

〔教家本校異〕浪とはなとの(日・関) 浪と花との(架・桂・

神・蓬・河・陽・御) 波とはなとの(河抜)

(3)秋は又しかのねつけしたかさこのおのへのほとよさくらひとむら

(9)

〔教家本校異〕おのへのほとに(日・架・桂・神・蓬・関・陽

・御) 尾上の外に(河) おのへのほとよ(河抜)

(4)あけわたるとやまのこすゑほのくとかすみそかほるをちの春か

せ、

〔教家本校異〕うらの春風(日・架・関・御) 浦の春かせ(陽) うちの春風(桂・神) 宇治の春風(蓬・河) をちのはる風(河

抜) (5)はるくとかわすむやとはかすみにてやとかるはなをはらふ山か

せ(24)

〔教家本校異〕わかすむかたは(日・架・桂・神・蓬・陽・御)

我すむ方は(河) わかすむ方は(河抜)

(6)いつこにもさこそは花をくしめともおもひいたるみよしのや

ま(33)

〔教家本校異〕いつくにも(日・架・桂・神・蓬・河・関・御)

いつくにも(陽) いつくにも(河抜)

(7)たかねよりたにのこすゑにちりきつゝねにかへらぬはさくらなり

けり(42)

〔教家本校異〕みねにかへらぬ(日・架・陽・河抜) 嶺にかへ

らぬ(河・関・御) ねにかへらぬは(桂・神) 根にかへらぬは

(蓬)

(8)はなちればやかて人めもかれはつるみやまのさとのはるのくれか

た(46)

〔教家本校異〕春のくれかな(日・桂・神・蓬・関・河抜) 春

の暮かた(架・河・陽・御)

(9) おほかたに身に、しむかせも秋のよは月ゆへとのみなりにけるかな

(52)

〔教家本校異〕 身にしむ風そ (日・架・蓬・河) 身にしむ風も

(桂・神・陽・御・河抜) 身にしむ風そ (関)

101 しかもわひむしもうらむる所とてつゆけきのへに月そやとれる、)

55)

〔教家本校異〕 月そ宿かる (日・架・桂・神・蓬・河・関) 月

そやとれる (御) 月そやとかる (河抜)

102 しかせによさのうらまつを、とふけて月かけよするおきつしらな

み (61)

〔教家本校異〕 しほ風の (日・架・桂・神・蓬・関・河・陽)

しほ風に (御) 塩風の (河抜) をとさえて (日・架・桂・神・

蓬・関・河・陽・御) 音さえて (河抜)

103 むしあけのせとのしほひのあけかたになみの月かけとをさかる、な

り (64)

〔教家本校異〕 とをさかるかな (日・関) とをさかるかな (架

・桂・神・蓬) 遠さかる哉 (河) とをさかる也 (陽・御) とを

さかるなり (河抜)

104 さひしきやおもひよはると月見れは心のそら、秋ふかくなる (75)

〔教家本校異〕 心のそこそ (日・桂・神・蓬・関・陽・御) と

ゝろの底そ (架・河) 心のそこに (河抜)

105 ひとりぬるねやのいたまにかせもれて、さむしろてらす秋のよの月

(77)

〔教家本校異〕 風ふれて (日・関) 風ふれて (河抜) 風吹て (

架) 風もれて (桂・神・蓬・御) 風もりて (河・陽)

106 よものうみな、みもし、つかに、すむ月のかけかたふかぬきみかみよか

な

〔教家本校異〕 なみもひとつに (日・架・桂・神・蓬・関・河

・陽・御・河抜)

107 よこくものあらしにまよふ山のはに、かけさたまらぬしのゝめの月

(93)

〔教家本校異〕 山のは、 (日・架・桂・神・蓬・河・陽) 山の

は、 (関) 山のはに (御・河抜)

108 ありあけになりゆく月をなかめても秋のゝこり、をうちかそへつ、

(98)

〔教家本校異〕 秋のなこりを (日・架・桂・神・蓬・関・陽)

秋の名残を (河・御・河抜)

109 なか月のありあけの月のあけかたをたれまつ人のなかめわふらむ

(99)

〔教家本校異〕 あかつきは (日) 暁は (関) あかつきを (架)

あかつきは(桂・神・蓬・河坂)明方は(河)明方を(御)

歌家本諸本間の異同は甚しく、歌家本古写本三本(日大図書館本・架蔵明応二年奥書本・河野記念館本)と定家本を対校しただけでも花月百首で五一首・六六ヶ所に異同があり、右の一八首は、明らかに一本の誤写と認められるものを除外し、歌家本諸本間の共通異文や問題となる異同をもつもののみを取り上げたものである。

さて、右の一八首の異同について、他の資料によって本文を校定できるものとして、嘗て荻野三七彦氏によって考察・翻刻された尊経閣蔵「花月百首撰歌」<sup>(3)</sup>および武田家蔵俊成本春記紙背文書があり、その翻刻によると、

(8)花ちればやかて人めもかれはつるみやまのさとの春のくれかた  
(花月百首撰歌)

仰しかもわひむしもつらむるところとてつゆけきのへに月そやとれ  
る。(紙背文書)

幽むしあけのせとのしほちのあけかたになみの月かけとほさがるな  
り。(同)

幽よものうみなみもしつかにすむ月のかけかたふかぬきみかみよか  
な。(同)

幽よこくものあらしにまよふ山のはにかけきたまらぬしのゝめの月

(同)

とあって定家本と一致し、さらに(4)は「後京極殿御自歌合」に撰入された一首で、自歌合では、

明わたると山の梢はるくと霞そかほるをちの春風(永言文庫本)とあり、第五句は書陵部本「おちの春風」尊経閣文庫本・群書類従本「遠の春風」とあるが諸本間に大きな異同はなく、また判詞に「此霞そかほると侍も、をちの春風袖にしむ心ちして侍れ」とあって、ほどこの歌の第五句は定家本の「をちの春かせ」と校定してよいと思われる。たゞ、歌合部類版本のみが「字治のはる風」とあり、判詞もそれに従って「うちの春風」となっているが、それはおそらく歌家本諸本のある一本よっての改変とみてよいのではないかと思われる。かくて(4)(8)(10)(12)(15)(16)の六首は定家本本文による校定をすることができる。

さて、他の一二首について検討すると、(1)は日本に「たに河の」と校異を示し、架・河本が「谷川を」とあるが、他の諸本すべて「谷河の」であって、これは本歌、

谷風にとくる氷のひまごとに打出づる浪や春のはつ花(古今・春歌上・当純)

を「谷河の打いづる浪」と凝縮した表現であって、正治初度百首の家隆の

谷川のうち出づる浪も声たてつ鶯さそへ春の山風(新古今・春歌)

上)

は良経のこの歌の表現を受けたものであって参考にならう。ただ「谷川の打いづる浪に見し花の」の句統きは熟さない表現であつて、「谷川を」はそれを合理化しようとした後人の改変であつたと見られる。

(2)は、教家本諸本一致して下句が「浪と花との見ゆるなるべし」とある。一体、花月百首は花五十首・月五十首二題の連作とも見られるもので、この歌に続く歌は、

さらに又ふものなみもかほりけり花のかおろすしがの山風(8)であつて、この歌は、花の香を吹きおろす山風によつて、蘆の浦浪も花の香にかおるといふのであるから、前歌は、比良山から琵琶湖を遠望する視点に立って浪と花を取り上げたと見るべく、定家本の「なみとは花の見ゆるなるべし」の蓋然性はなく、教家本の「浪と花との」が原の形であつたと思われる。

(3)は第四句「おのへのほとよ」が教家本諸本では「おのへのほとよ」とあり、河本の「おのへの外に」は誤りと思われるが、注目すべきは河野記念館「月清集抜書」に「おのへのほとよ」とあることで、この本は延宝二年の奥書をもつ、治承題百首・花月百首・句題五十首のみの抜書で教家本系統の本文をもちながら現行教家本と完全に一致するものがなく、(4)の「をちの春風」も教家本中たゞ一本

定家本と一致しており、或いは古形の教家本本文と伝えられたとも考えられ、定家本の「おのへのほとよ」が原形として正しい形であつたと思われる。

(5)の第二句は、教家本諸本一致して「わかすむかたは」となつてゐる。定家本では第二句「わかすむや」と第四句「やとかるはな」が重複し、所謂同心の病となるもので、内容から教家本の「わかすむかた」の本文が妥当であると思われ、定家本の誤りとみてよいと思われる。

(6)の「いづく」「いづく」は、古歌の諸例からみて、いずれとも決定しがたい。

(7)の第三句は教家本系に「みねにかへらぬ」の異文がみえるが、この句は久保田淳氏が指摘されたように、和漢朗詠集の「花梅帰根無益悔」に拠る表現で、金葉集・雑下・実行の、

ねにかへる花の姿の恋しくばただこの本をかたみとはみよや、西行の

ねにかへる花を送りて吉野山夏のさかひに入りて出でぬる(山家集)

散る花もねにかへりてぞまたは咲く老いこそはては行方知られぬ

(一)

吉野山雲もかへらぬ高嶺かなさこそは花のねにかへりなめ(一)

春に猶吉野のおくへ入りにけり散るめる花ぞ根にはかへれる

(一)

としばく詠まれたものであって、「みねにかへらぬ」は誤りである。

(9)は、第二句が教家本系に「身にしむ風ぞ」の異文がみえるが、仮に「ぞ」とした場合、この歌は第二句で中絶され、下句との句続きに無理が生ずるわけで、「身にしむ風も」の本文が正しいと思われる。

(10)の歌は、定家本によると、

しほかせによさのうらまつをとふけて月かげよするおきつしらな

み

とあり、教家本では

塩かせのよさのうら松音さえて月影よする興津しら波

となるわけで、初句は御所本のみ「しほ風に」であるが、「塩かせ」とするとこの句は「よさのうら」にかゝる枕詞的句法となるわけであるが、例えば良経の歌合百首・寄海人恋の、

塩風のふきこす海人のとまびさし下におもひのくゆるころかな

にみられるように、「塩風の」という句は主格構造として用いられるものであって、枕詞的句法は勅撰集を検するかぎり見当らない。

従って「塩かせのよさのうら松」の表現の妥当性はないと云えよ

う。問題は第三句の「音ふけて」である。「音ふけて」という凝縮した表現例は、新古今集・冬部に入集した慈円の最勝四天王院障子和歌の、

あじろ木にいさよふ浪の音ふけてひとやねぬる宇治の橋姫

に見られ、以後新後撰集・玉葉集一首、続千載集・新千載集二首がみえて、新古今集以後愛用された表現であるが、これは無名抄が新古今新風の新奇な詞として掲げた「露さびて・風ふけて・心の奥・あはれの底・月の在明・風の夕暮・春の故郷」に類した新奇な表現であって、実は無名抄に云う「風ふけて」は同じ花月百首の定家の

歌、

さむしろや待つ夜の秋の風ふけて月をかたしく宇治の橋姫

に詠まれたものであった。「音ふけて」は定家の「風ふけて」に比すれば、なお晦渋性は少ないと云えるが、方向としては同様の表現であって、良経がこの時期すでに定家とともに新奇な表現を模索していた一証となり得る表現である。嘗て久保田氏が花月百首良経詠で新奇な表現例として、

あけがたのみ山の春の風さびて心くだけとちる桜かな

を指摘されたが、この歌においても「音ふけて」という凝縮した新しい表現を試みたのではないかと思われ、定家本の「をとふけて」の本文の蓋然性が強いと思われるのである。

④は第三句「かぜもれて」が、教家本諸本では「風ふれて」「風吹きて」「風もれて」「風もりて」と異同があるが、「風ふれて」「風吹きて」は内容からみて論外であり、「風もれて」「風もりて」を比較すれば、動詞下二段と四段の差であって、自然的動作を示す「風もれて」が本文としては妥当であると思われる。

⑦は、第四句「秋のゝこりを」が教家本では諸本一致して「秋のなごりを」とある。この場合「有明けになりゆく月」は長月下旬の有明月になることを指しているから「秋のなごり」つまり、秋の季節の終った余韻とか余情を持ち出すことは矛盾であって、定家本に云う「秋のゝこり」が正しい本文であつたと考えられる。

⑧は、第三句の「あけがたを」が教家本では異同があり、「あかつき・あけがた」「は・を」の異同がみられるが、「なが月のありあけの月のあけがた」は千載集・廻旅歌・法眼兼覚の、いつもかく有明の月のあけ方は物やかなしき須磨の関守によつて成句となつていた表現と思われ、かつ下句との句続きの上から「あけがたを」とある本文が正しいと思われる。

以上、良縁花月百首本文を検討してみると、定家本・教家本主要本文異同一八首中、定家本に拠るべき本文一五首、定家本の誤りと認められるもの二首、不明一首で、定家本本文の優位性は明らかであり、

さびしさやおもひよはると月見れば心のそらぞ秋ふかくなる

の一首も、まず定家本本文を中心に考えねばならないと思われる。元来写本で「そら」「そこ」は誤りやすいものであつて、例えば歌合百首・寄歌恋の歌、

このころの心のそこをよそに見はしかなくのへの秋のゆふくれ（定家本）

は教家本諸本では第二句が「心のそらを」(日)「こゝろの空を」(架)「心の空を」(関)「心の空を」(蓬)「心の底を」(河)「心のそこを」(桂・神・陽・御)などと異同があるが、この歌は内容からみて「心のそこを」でなければならず、事実歌合の方では「新校六百番歌合」によると、陽明文庫甲本に「心のうちを」とある外は、諸本一致して「心の底を」であつて、室町期を溯りえない現行教家本諸本が転写の過程で誤つてきた跡をみることができるのである。こゝうして本文批判の立場からは「心のそらを」であつた蓋然性が高いが、さらに内容面からの検討が必要であらう。

## 二

「心の空」「心の底」が古来どのように詠まれてきたかというに、因歌大観を検討すると、「心の空」を含む句は、拾遺一・後拾遺一・

新古今四・新勅撰・統古今・統拾遺・新後撰・玉葉・統後拾遺・新  
千載各一首の一三首が見え、「心の底」を含む句は、千載二・新古  
今・新勅撰・統古今・統拾遺・新後撰各一首、玉葉六・風雅二・新  
拾遺一の一六首が見える。

時代的には「心の空」は貫之以後、「心の底」は西行以後であつ  
て、心の空の方が発想としては古いわけであるが、心の空の表現に  
は変遷があつて、例えば

(1) 相知れりける人の物へ罷りけるに、馬の餓しける間雨降りてと  
ゞまり侍ければ  
つらゆき

君を惜む心の空に通へばやけふとまるべき雨のふるらむ  
(玉葉・旅歌)

かみいたくなり侍りけるあした、宣耀殿の女御のもとに遣はし  
ける  
天曆御製

君をのみ思ひやりつゝ神よりも心のそらになりし宵かな  
(拾遺・雜恋)

遠き所に侍りける女に遣しける  
右大弁通俊  
おもひやる心の空にゆき帰り覚束なさをかたらししかば  
(後拾遺・恋三)

の三首は一語としての「心の空」ではなくて、貫之の歌は心が空に  
通つたからであらうかというのであり、天曆御製は心が空―虚ろに

なつた、通俊の歌は心が空を往来してといふのであつて、いずれも  
心が主格に立つ表現である。

(2) 入道撰政物語などして寝待の月の出づる程に、とまりぬべき事  
などいひたらばとまらむといひ侍りければ、よみ侍りける  
大納言道綱母

いかにせむ山のはたにだに止まらで心の空にい<sup>て</sup>む月をば  
(後拾遺・雜一)

(人)に遣しける 業式部  
入る方はさやかなりける月影をうはの空にも待ちし宵哉

かへし 詠人しらす

さしてゆく山の端もみなかきもり心の空にきえし月影  
(新古今・恋四)

これらの歌になると、一応「心の空」という暗喩表現が成り立つわ  
けであるが、「さしてゆく」の歌は、業式部の「うはの空」を受け  
て「心の空」というごとく、虚ろの意をかけた表現である。

(3) 寿量品の心を 俊専法師  
今ぞしる心の空にすむ月はわしのみ山のおなじたかねを

勸心をよみ侍りける 西行法師

やみはれて心の空にすむ月は西の山辺やちかくなるらむ  
(統古今・釈教歌)



〔新古今・釈教歌〕

中道観の心をよみ侍りける

信生法師

ながむれば心の空に雲消えてむなしき跡にのこる月かけ

〔新勅撰・釈教歌〕

などの歌は釈教歌の一群であるが、ここでは明確に心という空の意で、心の澄んだ状態を暗喩し、澄心の境に真如の月を見るのであって、いずれも心の空と真如の月とが対応しているわけである。こうした釈教歌にみられる心の空は、新古今新風当代歌人でその範囲は更に拡がり、自由になって、例えば、

秋とのみながめし夜はの月影は心の空にすみけるものを

〔拾玉集・日吉百首〕

ときわかぬ心の空の五月雨も草のいほりにはれざらめやは

〔同・厭離百首〕

世をいとふ心の空のひろければいる事もなき月もすみなん

〔同・同〕

こよひかも心のそらにまちし秋はやまのはにだにくものなきかな

〔月清集秋部・慈円〕

としをへて心の空にかくれどもあはれへだつるみねの雲哉

〔拾遺風草・一字百首〕

のごとくであり、特に「ときわかぬ」の歌にみられるように心象風

景としての表現を獲得しているのである。

一方、「心の底」の方は、

あかつきのあらしにたくふかねのおとを心の底にこたへてぞきく

〔千載・山家集〕

せをはやみみやたきかはをわたり行けば心のそのすむ心地する

〔山家集〕

みな人に心のそこを見せたらばふかき思をあはれみやせん

〔拾玉集・述懐百首〕

ねざめする心のそのわりなきにこたへてもなくをしの声かな

〔同・楚忽第一百首〕

君をいはふ心のそこをたづねればまづしき民をなづるなりけり

〔同・同〕

めのまへにかはり行める世の中の心のそこにとまりぬるかな

〔同・句題百首〕

わび人の心のそこにこたふなりおのへのかたのまつ風のをと

〔同・一日百首〕

夏の夜はうき暁の雲もなし心のそこに月はのこりて

〔拾遺風草・一字百首〕

をしのあるこほりのひまに風さえて心のそこぞまづはくだくる

〔同・一字百首〕

のごとく、心奥・心底の意で暗喩的表現意図は殆どない。

次に良経の歌をみると、「さびしさや」の歌を除いて、「心の空」二首、「心の底」四首がある。「心の空」は初期の十題百首・歌合百首に見え、十題百首の

秋はなをふきすぎにけるかせまでも心のそらにあまるものかは  
の歌は、秋はやはり吹き過ぎてしまった風までもが、秋の思いに私の心という空にみちあふれるものであろうかというのであって、心の空は心象風景の場として意識されている。

#### 歌合百首・寄煙恋

しのびかね心のそらにたつけぶりみせばやふじのみねにまがへては、  
忍恋の焦燥の思いを煙に喩え、「心のそらにたつけぶり」と表現した歌で比喩の段階を出ないものであるが、当時はこのような「心の空」も新しい詞つぎと映ったらしく、六百番歌合判詞に、

右申云「心の空如何」。陳云「心の空に出でん月をば」と云ふ歌  
同じ心か。右又申云「富士の煙に、まがへて見せては何にかはせん。  
猶富士の煙とこそは見えぬ、又、恋の煙ともなくて、心に煙を立たん事如何。」

と陳を繰り返し、俊成は「左歌、方人の煙、条々侍るめれど、見せばや富士の峯にまがへてと云へる姿・詞こそ、艶に侍るめれ」と判じて勝としている。「心の空」という表現の成立過程を見、「しの

びかね」の初句に注目すれば、「心のそらにたつけぶり」という比喩表現はさほど無理なものではなかったと云えよう。

「心の底」の方は、

このころの心のそこをよそに見ばしかなくのへの秋のゆふぐれ

(歌合百首)

心をは心のそこにおさめをきてちりもうてかぬゆかのうへかな

(治承題百首)

君をくもふこのころのそのふかさはにやかゝるあやめのおをやど

(夏部)

しけむ

みぐさるる板井の清水としふりて心の底をくむ人ぞなき

(統古今・恋三)

の四首で、いずれも心奥・心底の意であるが、注目しておきたいのは、「このころの」の歌で、下句の「しかなくのへの秋のゆふぐれ」が「このころの心のそこ」つまり恋のわびしらの心象風景の具象化であるという点である。このことから当時良経が、心を抒情として詠出するのではなく、心の世界を心象風景とし描き出そうとする態度をもっていたことが明らかになるわけで、それは西行・俊成などの心を抒情として詠出する方向を、心の客観化または心象風景の描出という方法によって一歩を進めようとした証左になるのであって、これが更に押し進められて新古今歌風を形成してゆくわけである。

もっとも右の傾向が花月百首に特に顕著に現われているわけではない。

いったい文治から建久初年にかけて新進歌人の歌には、「心」の語の頻用が目立つ。当時最も心を詠みこむことの多かったのは慈円で、例えば初期の述懐百首の二四首を初めとして、一日百首・勸句百首・花月百首・当座百首・十題百首・日吉百首が二〇首を超え、承元三年厭離欣求百首に三九首を詠み込むなど、慈円は終生変ることなく心の世界を詠んだ歌人であった。新進歌人定家においては文治三年大輔百首一六首を最高に、一字百首一五首・二見浦百首一三・閑居百首一一・堀河百首・花月百首・一句百首一〇首のごとく、心を詠み込む歌は文治から建久初年に集中し、以後減少しており、特に一字百首の詠法は顕著で、久保田氏はこの時期の「心」の頻用に異常さを感じつゝ、しかし、「心」を頻用するわりに、心理のあやをじっくり詠み込んだ作は殆ど見当らないことを指摘されている。

それが慈円の影響であつたろうことは、この時期比較的慈円に接する機会が少なかった家隆に少ないことから推察できる。幼年期以来、慈円に親炙してきた良経にあつても事情は同じであつて、建久元年、最初の百首であるこの花月百首に一四首、同年二夜百首一一首、建久二年十題百首一〇首と建久初年に高率を示し、六百番歌合以後は六二首の幅で低くなってゆくのであつて、建久初年の「心

」の頻用が注目されるのである。

ところで、良経花月百首の心を詠み込んだ歌は次のごとくである。

(1) なにとなく春の心にこそはれぬけふしらかはのはなのもとまで

(二〇)

あはれいかに心あるあまのながむらむ月かげかすむしほがまのう

ら(六二)

(2) しほりせでよしのゝ花やたづねましやがてとおもふこゝろありせ

ば、(三〇・自歌合)

あけがたのみやまの春のかぜさびて心くだけとちるさくらかな

(四五)

月だにもなぐさめがたき秋のよのこゝろもしらぬまつかせかな

(七四・新古今・自歌合)

をくやまにうきよはなれてすむ人のこゝろしらるゝよはの月かな

(七六)

秋ぞかしこよひばかりのねざめかは心つくすなありあけの月(八

六・自歌合)

うきよとはいつもさこそはおもへども心のたけをつきにしりぬる

(八七)

かきくもるこゝろいとふなよはの月なにゆへおつる秋のなみだぞ

(八八・自歌合)

うきよいとふころのやみのしるべかなわがおもふかたにありあけの月(九一)

(3) おもひやる心にかすむうみやまもひとつになせる月のかけかな

(六五)

さらしなを心のうちになつぬればみやこの月もあはれそひけり

(八四)

(4) みか月の秋ほめかすゆふぐればころにおきのかせぞこたふる

(五一)

さびしさやおもひはると月見れば心のそらぞ秋ふかくなる(七

五)

(1) は春の心・心あるあまといった趣ないし情趣を解するという一般的な意味で、さほど問題にならない。(2)の歌は、西行や俊成などからの傾向を踏まえた主情的な心情としての心を詠み込んだもので、花月百首の心の歌ではやはり中核をなす歌風であると認めることができよう。(3)は心の世界に想像される景、もしくは情趣を詠んだ発想の歌で、この傾向は例えば既に前年文治六年女御入内御屏風和歌のながめやる心のみちもたどりけりちさとのほかの旨のあけはのや、

心には見ぬむかしこそうかびけれ月にながむるひろさはのいけ

(歌合百首)

(院初度百首)

きよみがた心にせきはなかりけりおぼろ月よのかすむなみちになどに見えるもので、現実と対比される心の世界を展開し、初期の浪漫的傾向を示すものと云えよう。(4)はさらにその延長線上に心理的傾向を深化し、自然と交感する心を心象風景として描き出すのである。

このように見るならば、「さびしさや」の下旬は、心象風景として捉えた定家本の「心のそらぞ秋ふかくなる」に妥当性を感じるのである。

今日のな目からみると、「心のそらぞ秋ふかくなる」よりも「心のそぞ秋ふかくなる」の表現の方が、作者心奥の寂寥の極限の歌境が感じられて魅力的であるが、仮に作者が寂寥の心情表現として「心のそぞ秋ふかくなる」という表現を獲得したのであったならば、(2)に掲げた「しほりせで」「月だにも」「秋ぞかし」「かきくもる」の歌とともに建久九年自撰の後京極殿御自歌合二百首の一首として撰び入れたのではないかと思われ、撰入しなかったのは、(4)の「みか月の」の歌が自然交感の秀歌であるにもかゝらず撰び入れなかったと同様、この歌が「心のそらで秋ふかくなる」という心象風景の歌であったからに外ならないと考えるのである。

注(1)「秋篠月精集とその研究」研究篇Ⅰ定家本と教家本の性格(笠

間書院・昭51)

(2) 同書付録、月精集定家本・教家本主要諸本本文和歌校異一覧

(3) 「俊成本春記その後の発見」歴史地理・昭15・1

(4) 「藤原俊成本春記並にその抵背文書の研究」史学雑誌・昭14・2

(5) 「新古今歌人の研究」第三篇・第二章新古今への道・六五一頁(東

大出版会・昭四八)

(6) 同書、六六三頁。

(7) 同書、六二八頁。

本稿は、昭和53年7月和歌文学会関西例会で「良経花月百首の歌」の題  
で口頭発表したものである。

御教示を賜った会員諸氏に感謝申し上げます。